

平成 29 年度第 4 回本郷新記念札幌彫刻美術館運営協議会
議 事 録

日 時： 平成 29 年 3 月 17 日(金)午前 10 時～11 時 30 分

会 場： 本郷新記念札幌彫刻美術館 本館 研修室

出席委員：石井正治(札幌市市民文化局文化部文化振興課長)

四釜みちこ(札幌市立大倉山小学校 PTA 副会長)

坪田康嗣(宮の森まちづくりセンター所長)

吉田重弘(宮の森大倉山連合町内会長)

渡辺寛志(札幌市立三角山小学校長)

國松明日香(彫刻家)

寺嶋弘道(本郷新記念札幌彫刻美術館館長)

所 管 課：工藤一也(札幌市市民文化局文化部文化振興課担当係長)

川上園代(札幌市市民文化局文化部文化振興課振興係)

事 務 局：樋泉綾子(本郷新記念札幌彫刻美術館業務係長)

加藤正浩(本郷新記念札幌彫刻美術館業務係)

議事録：

1. 平成 28 年度事業経過報告

樋泉業務係長より展覧会事業について、加藤職員より普及事業と現時点のアンケートの集計結果について報告した。

2. 平成 29 年度事業予定

樋泉業務係長より展覧会事業について、加藤職員より普及事業について説明した。

3. 意見交換

上記の報告を踏まえ、各委員から下記のような意見が挙げられた。

●今年度の事業について

(國松)：昨年度の北海道新聞での記事掲載にはじまり、メディアに注目されるようになってきたことで、雪像彫刻展は彫刻美術館の事業として定着してきたのではないだろうか。

個人的には夕暮れの時間帯のライトアップされた風景が幻想的でとても良いと思う。さっぽろ雪像彫刻展実行委員会と協力しながら今後もぜひ継続してほしい。

(樋泉)：前年は会期初日に北海道新聞朝刊の地域面に大きく掲載されたので、791 人の来場者があった。今年度は昨年度には及ばないが、安定した来場者数を保っている事業である。

(四釜)：冬休み子ども造形教室に子どもが参加して、プロの彫刻家である國松先生に指導していただき、参加した親子にとって非常によい経験だったと思う。美術館に気軽に足を運ぶきっかけになったと言っていた親子もいた。

(國松)：講習会は小学生には少し難しい話だったかもしれないが、レオナルド・ダ・ヴィンチの話など、

大人になってから気づいてもらっても良いのではないかと思います、あえて指導のレベルを下げずに行なった。

(四釜):子どもが物事を受け止める・理解する力は、われわれ大人が思っている以上にあるので、今回の指導内容で逆に良かったのではないかと。また学校教育では発想を求められる授業内容が増えており、デッサンのような実技を学ぶ機会が少なくなっているため、このような講習会は貴重な機会だと思う。

(石井):札幌彫刻賞について、応募人数が前回よりも少なくなったという報告があったが、それほど気にすることではないのではないかと。受賞作品は地下歩行空間という特殊な場所に設置している。現在展示している谷口氏の作品は本来は可動性がある作品なので、時期によって形を変えられるようにしても面白かったのではと思うが、立地の性質上難しく残念だ。また、地下歩行空間では通行人数は多いが「通り抜ける」という人が大多数なので、じっくりと鑑賞する人が少ない。個人的な見解だが、将来的には市民交流プラザのようなところに設置するのもアイデアとして考えられるのではないかと。

(寺嶋):札幌彫刻賞のような公募では審査員側が何を考えているかが問われている。前回の谷口氏の作品は安全性を考慮した結果、作品本来の良さを活かせなかった。そういう意味ではどの作品を選ぶか非常に難しい。第1回の受賞作品はアカデミックな作品ではない現代アート作品である。しかしその一方設置場所は現代アートの作品を活かせる空間ではない。前回の結果を見て応募を思いとどまった作家もいたのではないかと。リニューアルしてまだ2回目という状況ではあるが、この公募がどこに重点を置いているかが見えていない。

●次年度の事業やアンケート集計結果について

(寺嶋):雪像展は、若手の作家や芸術・デザインを志す学生が本格的な彫刻づくりを行い、身近に彫刻家がいるなかで交流ができる点が非常に良いと思う。

新年度の子ども育成事業は、実際のアーティストと「出会い、共に作品をつくる機会」「人とふれあうきっかけ」を提供することを主眼に置いている。

(四釜):子ども育成事業に参加する学年やクラスはもう決まっているのか。

(樋泉):現在学校と調整中なので、まだ確定していない。

(渡辺):芸術家の方と一緒に作品を作り上げるのはとても良い経験なので、楽しみにしている。

三角山小学校では鑑賞教育の方法と、それをどのように授業評価をするか教員が学んでいる。2月に開催した3年生の作品展「大すきなもの展」は、1年生、2年生の児童と先生が見学に行き、児童だけではなく教員も次年度以降自分たちが担当するかもしれない彫刻美術館での学習のイメージを膨らませている。

(吉田):札幌西高校の卒業式に行った時に、参加者がロダン展を話題にしていた。卒業生を含めた生徒や校長をはじめとした教員も観覧に来ていたようだ。

(寺嶋):現在当館では高校や大学との連携が弱い。西高校とも疎遠になっているので今後の課題である。

(國松):西高の輔仁会(同窓会)では、次年度本田明二さんの作品を鋳造してキャンパスに設置する計画を立てている。

(坪田):1月のギャラリートークに始めて参加したが、解説があると気づくこともあるので今後も継続していただきたい。良い事業を行なっているので、来場者数にとらわれすぎなくてもよいのではと思う。

(寺嶋):来場者数にとらわれているわけではないが、現時点で9,550人、あと少して10,000人なので何とか達成できるように努力したい。

(四釜):円山動物園で販売しているような年間パスポートの導入を検討してはどうか。300円とはい

え、毎回観覧料がかかると来館にためらうところがあるのも事実だと思う。

(寺嶋): 似たようなケースでは北海道美術館協力会の会員制度がある。年会費を払えば全道の加盟美術館に何回通っても料金がかからない。当館では今年度、連続講座受講者向けにはあるがパスポートを作った。

(國松): 地下歩行空間の札幌彫刻賞受賞作品の設置場所が彫刻美術館のアンテナギャラリー的な要素をもっと出せればよいのではないかと思う。

アンケートに記載があった記念館の石膏の色についての紹介などのように、彫刻美術館に来れば彫刻の全てがわかるというような場所になれば理想的である。札幌彫刻美術館友の会が持っている鑄造方法を紹介した映像などを有効活用するのも手ではないか。

また、英語版リーフレットを今年度制作したが、将来的には中国語、韓国語の案内もあれば良いのではないか。

(寺嶋): 次年度は記念館の一部を本郷新と彫刻の情報コーナーにする予定である。

4. その他

- ・次年度の委員委嘱、運営協議会の開催日については、改めて連絡することを確認。